

公園で野外ライブをしていると、天使が舞い降りてきた。公園には魔除けの結界を張っているのに。

「あなたの歌声、とてもステキね。私も聴衆になりたいの」

断固拒否！ とバンドメンバーは笑いながら言った。俺だけは真摯な目で天使を見つめる。

「飴色空に輝く、公園に俺の声を響かせる。それはどれだけ大したことないことなのかはわからないが」

「なにそれ」

「夕陽を見つめながら、傍に君が居たら、他に何もいらない」

「だから、それはなに」

「一緒に眺めた景色が綺麗なら、隣に居る君にも伝わるだろう、感じた幸せを確かに噛み締めながら」

「？」

まあ、俺らが作っている曲の歌詞だよ、聴衆になりたかったんじゃないのか？

「ああ、なるほど。じゃあ、そんな安っぽい歌しか歌えないの？」

「俺らはインディーズでもない素人バンドだからな。そんなもんしか浮かばんのよ」  
「へえ。でも、なんか、ありがちだけど、面白い感覚にはなったわ」

「それはどうも。それにしても、あんたは天使なら少しはわかるんじゃないのか？」

「と言いますと？」

「言葉が伝わるんなら、あんたもバンドでも組んでみたら？」

「じゃあ、加入しましょうか」

「マジすか」

「うん。じゃあ、歌うね？」

そして、自前の鎌かと思つた、ギターを持つている天使は勝手に俺らのアンプに繋ぐ。そしてオリジナルのコード進行でとんでもないヘヴィメタルを奏で始めた。

星屑だけだったんだ

私だけが見つめている星屑は

いつも空で輝いている

私の知っている空は今でも何色？

あなたの知っている景色は今でもこの色？

それでも確かに信じていられる

君が傍にいるからだ！

星屑だけだったんだ  
私だけが見つめている星屑は  
いつも心で輝いている

私の好きな空は今はもう輝かない  
貴方の求めた景色も輝かないでしょ？

だから、私は求めた  
もう、いないはずの君を確かに感じながら  
この音色に全てを乗せて

星屑だけだったんだ  
私だけが見つめている星屑は  
いつも傍で輝いてた

私だけだったんだ

あなたが見つめていた黄昏の空は  
今でも傍で見ている私に言った

夕陽を見つめながら、傍に君が居たら、もう何もいらない  
夢を抱きながら前へと進んでいくよ

「そんな感傷的な内容なのになんでヘヴィメタルなの？」

内容があまりにもチープなのはお約束事だが、俺の心に届いた。

「じゃあ、私は離脱するわね」

ありがとうねえー！ と天使のギタリストは帰っていった。

残された俺達はそのヘヴィメタルを楽譜に書いた。そしてその歌が大ヒットをしたというのは言うまでもない。